

命の大切さを学んだ日から今

諏訪実業高校一年 渡辺 恵里奈



昨年の七月二十九・三十日、私が広島平和体験学習に参加しようと思ったのは、「原爆ドームを間近で見たい」という理由からでした。そんな思いを胸に、広島に行きました。着いて最初に思ったのは、「すごい都会だな」ということでした。緑が少なく、お寺などがたくさんあって、と想像していたのとは反対に、木も草もたくましく育ち、町も栄えていて、今の広島からは昔原爆が落ちた所とはとても思えません。ですが、そんな思いは、原爆ドームを見た瞬間になくなりました。原爆ドームは、かろうじて骨組みだけ残り、原爆の強い熱風で、レンガとガラスは溶けて

地面に落ちていました。その姿を見るととても怖くなり、改めて原爆・戦争のおそろしさを知ることができました。資料館では、逃げるすきもなかった子どもが座っていた影が、そのままコンクリートに写ってしまっていたり、自転車写真が真っ黒こげになっていたりする写真があつて、思い出すだけでも少し怖くなります。



骨組みだけ残った原爆ドーム

被爆者の方の話は、本当にその時代を生き抜いた人だけあつて、聞いていけるうちに光景が頭の中に浮かんで来て、涙する所もありました。原爆を受けて姿形が変わりすぎたため、自分だと親に分かってもらえなかった子どもの話ほど、つらいものはありませんでした。自分では体験していない、教科書にしか載っていないような話を聞いて、「本当にあったことなんだ」と改めて実感できました。同時に、戦争の恐ろしさ・怖さを痛いほど感じました。

この様な体験ができて、私は大変よかったです。戦争を争・原爆、平和などに全く興味なかった私が、今は、戦争をするような可能性を少しでもゼロにしたいと願い、もつと国と国とが仲良くなれば平和になるのではないかと、などと考えるようになりました。今でも広島体験学習の事を思い出すことがあり、少し怖くなったりもします。これから体験学習に行く人たちも、私と同じように、一つでもよいから何かを感じ取って来てほしいです。

八月のこゑ

先日遅くに帰宅した際、居を構えて半年ほどの自宅の玄関先でふと夜空を見上げ、町なかに位置している我が家からも、そこそこ星が見えるのだということに初めて気付きました。

近頃のことを思い返してみても、星空を眺めることもめつきりなくなりました。同じように、日々の生活の中で、自然が奏でる音に耳を傾けたり、風に運ばれる香りを感じたり、空気の変化で季節の変わり目を知ったり：といったことが減ってしまつたように思います。住み心地の良い家に暮らし、自動車ですぐいと移動する私たちは、自然界との間に壁を作り出すことで「快適」を手に入れたかもしれません。

たまには家中の窓を開け放して夜風を呼び込み、虫の声を聞きながら、何も考えずに夜空を眺めてみたいと思います。

(田中)

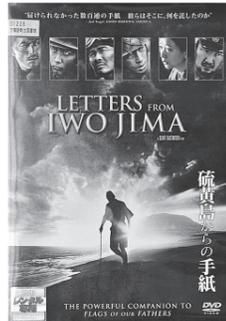
読んでみませんか?

下諏訪町立 図書館より

胸がえぐられるような痛みを覚える、本とDVDの紹介です。「平和への切なる願い」は、痛々しい戦争の記憶なくしては生まれてこないものなのかもしれません。だからこそ、『戦争の理不尽な悲惨さ』を風化させてはならないと思うのです。

DVD 『硫黄島からの手紙』

クリント・イーストウッド監督



本州から約1200キロメートル離れた小笠原諸島の硫黄島。現在は自衛隊基地があり、一般住民は誰もいない。2006年、この小さな島の地中から多数の手紙が発見された。この島で戦った男たちが家族に宛てたものだった。届くことのなかった手紙に、彼らは何を託したのか。硫黄島で彼らが見たもの、感じたもの…。それは、想像を絶する戦いの日々だった。(ワーナー・ホーム・ビデオ)

『戦場で心が壊れて』

アレン・ネルソン著

18歳のときベトナム戦争に従軍した、元アメリカ海兵隊員アレン。多くの人を殺し、村を焼き払う。13ヵ月後に帰還した時は、PTSD(心的外傷後ストレス障害)になっていた。「なぜあなたは人々を殺したのですか?」の問いに、「戦争だったから」「命令だったから」。しかし、彼が自分の心の中をのぞきこんだとき出てきた答えは…。20年にわたる、彼の病と治療体験の語り口は、まるで木が話しているかのよう…。彼が日本人に読んでほしいと願う、心にしみ込む1冊。(新日本出版社)



V アン・クレイマー著

第2次世界大戦中、ナチスの迫害から逃れるため、2年もの間隠れ家で過ごし、収容所で最後を迎えたアンネ・フランク。彼女の遺した日記は世界中で読まれ、多くの人々の心の中で、彼女は生き続けている。

本書は、アンネを知る人々の証言やたくさんの写真で、彼女の生涯を紹介するだけでなく、多くのユダヤ人の身に起きた迫害という惨劇を子どもにわかりやすく伝える1冊となっている。(BL出版)



ほのぼの まちかどで

庭木の刈り込みをしている方がいた。大きな樹木の刈り込みが終わると、道に出て、垣根の手入れが始まる。自分の敷地線からはみ出した枝を、線より思いつき控えて刈り込んでいく。理由を伺うと、夏になると新しい枝がぐんぐん伸びて来るから、それを見込んで相当短く刈り込むのだと。また、歩道を歩く人の目に枝が刺さるから、怪我をしないよう、枝が道行く車のボディを傷つけぬようにと配慮していると。優しい方だ。確かに背の低い子どもたちにとって垣根の飛び出した枝は凶器とも言えよう。さらには歩道ラインの半分位まで茂っていると、人は車道を歩かなければならない。雪道になれば、なおさら危険である。

道行く人が怪我をしないよう、また交通安全の面からも、公道である歩道に垣根の枝がはみ出さないよう心掛けようと思う。

(上脇)